

スクールポリシーに基づいて生徒の主体的・対話的な 学びと探究心を刺激し、 「学びに共感と責任をもつ」生徒の育成を目指す実践

—高2 論理国語「『具体と抽象』の重要性と必要性を1年生に伝える
授業を行おう」の実践から—

愛知県立犬山総合高等学校 教諭・田中琢斗

<研究の概要>

本校が定めた生徒育成指標のうち「思いやりのある人」「責任をもつ人」の育成を目指して、高2 論理国語において「学んだことを下級生に授業する」ということを言語活動とした授業を行った。この実践を通して生徒は「共感力」及び「学びへの責任感」を身につけることができた。スクールポリシーを念頭に置いた授業は、着実に学校全体に広まりを見せている。

<検索用キーワード>

国語教育 主体的 対話的 I C T スクールポリシー チェンジメーカー

1 主題設定の理由

本校は全日制普通科として45年の歴史を刻んできたが、「県立高等学校再編将来構想」に基づき、令和5年度から新たに総合学科としてスタートした。令和6年度現在、2回生が入学し、普通科では実現が困難であった地域社会の課題解決を通じた探究的な学びや、アントレプレナーシップやメディアデザイン等、チェンジメーカーとして活躍するための専門的な指導を行っている。その中で作成されたのが「犬山総合高等学校が目指す生徒像」のポスター(図1)である。これは本校スクールポリシーが定める「目指す生徒像」である、「チェンジメーカー『あらゆる課題を自分事としてとらえ、自分や社会を変えてみんなを幸せにする人』」と、それを実現するために必要な要素を大まかに「創造」「同心協力」「向上と内省」の三点で捉え、さらに六つの観点で細分化して整理したものである。

ここで重要になるのは、図1にある六つの観点は「産業社会と人間」や「総合的な探究の時間」といった、いわゆる「探究的」な授業の中だけで指導するものではないということである。日常的な各教科・科目の指導が、これらの観点を意識したうえで行われることで、生徒が主体的・対話的で深い学びのもと、「目指す生徒像」にある人物へと成長できるように指導する必要がある。

本実践は、六つの観点のうち、特に「03 思いやりのある人」「06 責任をもつ人」という観点に着目し、生徒が学んだ内容を下級生に伝える中で、自己有用感や他者への共感力を高め、自身の学びに責任感をもって向き合い、主体的に学習に取り組む姿勢を身につけられることを期待する。

また、本校が「令和6年度あいちラーニング推進事業」の重点校になっていることもあり、ICTの活用と他の教員との協働という観点も意識した。

2 指導の目標

(1) 本校生徒の実情

本実践の対象は第2学年の全員(1組から4組、各クラス38名から39名)とした。1年次から総合学科の必修科目である「産業社会と人間」や各教科・科目においてパワーポイントを用いて発表する機会が多く、人前で発表することに強い苦手意識は見られない。一部の生徒は、課外の地域探究活動をコンクールで発表したり、中学生向けの学校見学会で模擬授業を担当したりするなど、プレゼンテーションスキルを用いて活躍する姿も見られる。一方で、学習そのものへの苦手意識をもっている生徒は多く、自己肯定感や自信をもちにくい状況である。同時に、2年生ということで学校生活への慣れもあり、学習のモチベーションを保つことが難しい生徒も一定数いる。

(2) 指導のねらい

自身が学んだことを1年生に伝えるということに責任をもち、授業の内容について主体的に理解したり、よりわかりやすく伝えるために改善を試みたりする能力を身につけさせる。その過程で、生徒は自身の学びが人の役に立つということを感じて、自己有用感を高



(図1)

めるとともに、学ぶことの楽しさや意義について再認識し、今後の学習活動により主体的に向かえるようにしたい。

3 方法

2年生論理国語の授業において、取り上げた文章について読解したのち、「具体と抽象の重要性と必要性を1年生に授業する」というテーマで7分程度の授業をするためのパワーポイントを作成した（以下、本実践における「2年生が1年生の教室で発表すること」を「授業プレゼン」と呼ぶ）。グループごとに「授業プレゼン」の練習をしたのち、2年生のクラス内で「授業プレゼン」をし、代表の2グループを選定した。その後、代表グループが1年生の国語科の授業に入り、「授業プレゼン」を行った。この様子はMicrosoft Teamsの通話機能で同クラスの2年生が待機するクラスに中継で繋げ、「授業プレゼン」の様子を観察できるようにした。

「授業プレゼン」後は1年生・2年生共にフィードバックシートを記入し、2年生は各自振り返りを行うことで、次の単元の言語活動へ向けて、学びの調整を行えるようにした。また、実際に「授業プレゼン」をした生徒を対象に事後アンケートを実施し、効果測定を行った。

4 実践

(1) 単元名

『具体と抽象』の重要性と必要性を1年生に伝える授業を行おう

(2) 評価基準

言語活動の評価基準は次のとおりである。

思考・判断・表現（読むこと）

観点	A	B	C
設定した題材（「具体と抽象」）について、情報を整理し、考えを深めている	「具体と抽象」の重要性について論拠を明確にして整理し、伝える内容に説得力をもたせ1年生の理解を促すことができている。	「具体と抽象」の重要性について論拠を明確にして整理することができている。	「具体と抽象」の重要性について整理しようと努めている。

主体的に学習に取り組む態度

観点	A	B	C
主体的に学習に取り組む態度（ア）	発表内容について、『具体と抽象』を学ぶ意義やその具体例についてよく検討したり、練習を繰り返したりして、内容を改善することができている。	発表内容について、『具体と抽象』を学ぶ意義やその具体例について検討したり、練習を行ったりして、内容を改善することができている。	発表内容の改善に努めようとしている。
主体的に学習に取り組む態度（イ）	自他の発表をもとにフィードバックシートを作成したり、1年生が記入したフィードバック	発表をもとにフィードバックシートを作成したり、1年生が記入したフィードバックシ	フィードバックシートを記入し、発表について振り返りを行おうとしている。

	クシートを見て発表について具体的に振り返ったりすることができている。	トを見て発表について振り返ったりすることができている。	
--	------------------------------------	-----------------------------	--

※（ア）・（イ）は、それぞれ「粘り強く学習に取り組む態度」と「自らの学習を調整しようとする姿勢」である。

（3）「授業プレゼン」までの流れ

2年生の論理国語は、もう一人の国語科教員（A教諭）とクラスを二分する形で担当しており、日ごろ指導にあたるのは一度に20名程度ということになる。

今回、「授業プレゼン」をするにあたり、テーマは『具体と抽象』の重要性と必要性とした。「具体と抽象」という叙述の関係は、文章を論理的に読解するうえで最も重要な項目の一つである。自己有用感や学びへの主体性を身につけさせることが本実践の大目標ではあるが、「具体と抽象」について理解を深めることも非常に重要である。国語の授業は「いま何のために何を学んでいるか、よくわからない」と生徒が感じやすいと考えているので、「論理的読解のために、具体と抽象について学んでいるのだ」ということも毎時間生徒と共有するようにした。

全7コマ（1コマ50分）の構成で、はじめに最終的な言語活動である『授業プレゼン』をする」というゴールを生徒に共有した。授業の中でこのことを繰り返し生徒に伝え、筆者の指導の中で、「授業プレゼン」をする際、生かせると思う伝え方や具体例についてメモするよう指示した。逆に、わかりにくいと思った点についても覚えておくように伝えた。こうすることで、生徒がより主体的に「授業プレゼン」のために「具体と抽象」というテーマの理解に努めると考えたためである。次に、教材として用いた伊藤亜紗「記号的メディアと物理的メディア」（大修館書店『新編論理国語』所収）を通読した。本教材を選択したのは、抽象的事柄とその具体例が何度も往復され、「具体と抽象」の関係について理解を深めるうえで良い例となるからである。

教材読解ののち、各グループ3～5名ずつに分かれて、「授業プレゼン」の準備をする時間を2コマ程度とった。下記の評価用ルーブリックを先に示し、評価基準を意識してパワーポイントを作成するよう指導した。

観点	5点	3点	1点
①「授業プレゼン」の内容が適切で、聞き手の学びに向かう姿勢を引き出す	「具体と抽象を学ぶ理由」の説明がわかりやすく、内容に納得でき、「具体と抽象」について、さらに勉強しようと思えた。	「具体と抽象を学ぶ理由」がわかりやすく、内容に納得できた。	「具体と抽象を学ぶ理由」を説明しようと努めていた。
②共感力を持って具体例を考える	「具体と抽象」という概念を、身近でわかりやすい具体例を用いて説明できた。	「具体と抽象」という概念について、具体例を用いて説明できた。	「具体と抽象」という概念について説明しようと努めていた。
③聞き手を引きつける発表ができる	声がよく聞こえて、自信をもって授業しており、パワーポイントも見やすかった。	「声がよく聞こえて自信が感じられる」か、「パワーポイントが見やすい」のどちらかは達成できた。	「声がよく聞こえて自信が感じられる」か、「パワーポイントが見やすい」のどちらかを達成しようと努めていた。

自分たちが1年生に授業しに行くということで責任感が刺激され、わかりやすく、1年生が楽しんで授業を聞けるよう工夫をする等、各グループが趣向を凝らして発表の準備に取り組んだ。グループによっては納得できるまで準備したいということで、授業後に残って準備したり、プレゼンの内容を教員に相談しに来たりもしていた。

(4) 「授業プレゼン」の実際

まずはグループごとにクラスメイトの前で「授業プレゼン」を行い、相互評価をした。真剣に準備してきたこともあり、ほぼ全員が「声がよく聞こえて、発表が面白いから」等の理由ではなく、ルーブリックにしたがって適切に評価し、1位のグループを決めることができた。生徒の評価と教員の評価で大きな差異があった場合、教員の評価で代表グループを決める予定であったが、実際にはほとんど差異が見られず、生徒は妥当な評価をすることができていた。A教諭が担当するクラスでも代表が決まり、各クラス2グループの「授業プレゼン」代表グループが確定した。

そして実際に1年生のクラスで「授業プレゼン」を実施した。1年生の国語科の教員には実施の2か月ほど前から授業時間をいただくをお願いしており、予定通り実施することができた。まず2年生をクラス全員ホームルーム教室に集め、本時の目標を共有した。そして筆者が代表グループを連れ1年生の教室へ、A教諭はホームルーム教室で残りの生徒を指導した。1年生の教室とはMicrosoft Teamsの通話機能を用いてオンラインで繋ぎ、その画面と音声をプロジェクターで投影し、授業の様子・音声を残った生徒全員で聞けるようにした。

代表グループは1年生を前に緊張しながらも、「具体と抽象」というテーマについて理解してもらうべく、恋愛をテーマにした劇をしたり、机間巡視しながら1年生に質問をしたり、「文章を読む際、筆者の意見を見つけやすくなるから理解しよう!」と伝えるなど、わかりやすく伝えようと努めていた(写真1・2)。

「授業プレゼン」を終えたグループはホームルーム教室に戻り、フィードバックシートを記入した。教員や見ていた生徒から代表グループへフィードバックを行い、感想や次回への課題を全体で共有した。

(5) 生徒の感想・フィードバック

代表グループとなり「授業プレゼン」を行った生徒からは「聞いている1年生に問いかけるように発表できたので良かったと思う。しかし、もう1班の発表を聞いて、質問をもっとしたほうが良かったと思った。」「最初クラスでやってから自分の悪いところを見つけてそこを改善したので、少しだけ変わった気がします。」「問いかけをしたが、(1年生にとっては)難しそうだった。早口になってしまったと思うし、スライドを見て発表していたから、もっと仕上げられたと思った。身振りや画像を上手く使えば、もっとわかりやすく伝えられたのではないかなと思う。」「と、今回の「授業プレゼン」を客観的に評価できており、次回の発表への熱意も感じられた。



(恋愛を例にした生徒 (写真1))



(机間巡視する生徒 (写真2))

1年生が書いた代表チームへのフィードバックとしては次のようなものがあった。「劇をおこなって、実際に話をするとき、（具体と抽象を使い分けることで）どう状況が変わるのかわかりやすかった。」「最初に問いかけることで、理解が追いつきやすかった。」「具体例をはっきりと出して、聞いていてわかりやすくて、いいなと思った。身近に感じられる内容で、わかりやすかった。」「2年生の先輩たちがみんなの机をまわって話しかけているのがとてもいいなと思ったし、すごいなと思いました。」「一方的に話をするんじゃないくて、こちら側に問いかけをしている部分が、授業を飽きさせない工夫として良かったと思う。」と、2年生の「授業プレゼン」を真剣に受け、「具体と抽象」について学ぶ意義や効果を理解できたことがわかる。これらの感想は名前を伏せて、各クラスの生徒が所属する Teams に PDF で共有し、閲覧できるようにしている。2年生はその感想を読み、次の言語活動へのモチベーションを高めていた。

惜しくも代表とはならなかったチームの2年生の生徒は「相手（1年生）が聞きやすい発表をしていた。自分たちの発表と比べると、「具体と抽象」を説明する例がより具体的で、わかりやすかった。」「クイズ形式にすることで、聞いている人を参加させられたり、自分で考えられたりするとわかった。」といった感想を書いており、次の発表へ生かそうとする姿勢が見られた。今回の実践では、多くのグループで代表になれなかったことを悔しがる様子が見られたことも、言語活動への主体性が感じられ印象的だった（太字内の（）は筆者による加筆である）。

5 効果測定から見る成果と今後の課題

(1) 効果測定の結果と考察

「授業プレゼン」実施後、授業の振り返りとしてのフィードバックシートとは別に、「授業プレゼン」をした代表生徒にアンケートをおこなった。

まず「授業プレゼン」実施前後の授業への「やる気」や「興味」を5段階で聞いた。

アンケート問1「1年生に授業をしに行く前までの、論理国語の授業への「やる気」や「興味」はどの程度ですか。」（有効回答数24名）					
アンケート問2「1年生に授業をしに行った後の、論理国語の授業への「やる気」や「興味」はどの程度ですか。」（有効回答数24名）					
段階が上がった生徒：7名（29%）	変化のない生徒：13名（54%）			下がった生徒：4名（16%）	
問1の回答の実人数（参考）	5：5人	4：11人	3：7人	2：1人	1：0人
問2の回答の実人数（参考）	5：7人	4：9人	3：8人	2：0人	1：0人

「段階が上がった生徒」と「変化のない生徒」が全体の83%を占めている。「変化のない生徒」が多い理由として、当該生徒は全員「3」以上を選択しており、普段から論理国語にある程度高い関心をもっている生徒が代表に選ばれたことが考えられる。また、「下がった生徒」も全員が問2について「3」以上を選択しているが、「1年生の反応が薄く、いい説明ができていないか不安だった。」「緊張したし、楽しませる工夫が難しかった。」という感想が見られるなど、実践の不安に伴ってモチベーションが下がったと予想される。

次に「授業プレゼン」が自己有用感に繋がるかを確認した。

アンケート問3「1年生へ授業をしに行ったことで、「自身の学びが誰かの役に立つ」と感じることはできましたか。」（有効回答数：24名）				
5とても感じた：5名（21%）	4感じた：11名（46%）	3ふつう：6名（25%）	2あまり感じない：2名（8%）	1全く感じない：0名（0%）

こちらでも5・4を選択した生徒が全体の67%を占めており、ある程度自己有用感を認識できたことがわかる。問3についてはその理由についても記述させたが、5を選んだ生徒の中には、「人に何かを教えるっていう機会はあまりないから、とてもいい。みんなの『理解した！』っていう顔がとってもよかった。」と、まさしく本実践が求める自己有用感を体現してくれた生徒もいた。2を選んだ生徒は「時間をかけて、プレゼン資料作りや練習をしていたらもっと良かったのかなと思った。」と学びに対して真剣に向き合う姿勢があるからこそ生まれる反省をもっていた。

最後に「授業プレゼン」によって、「具体と抽象」への理解が深まったかを確認した。

アンケート問4「1年生へ授業をしに行くことで、「具体と抽象」への理解が深まったと思いますか。」（有効回答数：23名）				
5 とても思う： 10名（43%）	4 少し思う： 9名（39%）	3 変わらない： 3名（13%）	2 あまりそう思わない： 1名（4%）	1 全くそう思わない： 0名（0%）

前述のとおり2年生が「具体と抽象」の関係について理解を深める点も疎かにしてはならない。アンケートから、82%と多くの生徒が「授業プレゼン」の準備や実践というアウトプットによって「具体と抽象」の関係について学びを深められていることがわかる。

（2）成果と今後の課題

本実践は、スクールポリシーの六つの観点のうち、「03 思いやりのある人」「06 責任をもつ人」という観点を主眼に据え、「学んだ内容を下級生に指導する」という手段を用いた。この方法はフィードバックシートや代表生徒のアンケートから、主体的に学習に取り組む態度や他者への共感力向上に一定の効果があったと判断できる。

アンケート問3からは、自己有用感を高められた代表生徒がいることもわかる。同時に、「具体と抽象について理解を深める」ということに関しても、アンケート問4から生徒の理解は深まったと考えられる。また副次的なものではあるが、4(5)に記載した代表生徒の感想にあるとおり、「身振りや画像」の有効性からノンバーバルコミュニケーションが情報伝達に与える影響を実感できた生徒がいたことも、本実践の収穫だと考えている。

しかし、1科目・1単元の実践だけでは定量的なデータに乏しく、実践前後の生徒全体の変化について、さらに多角的な視点で長期的に観察していくことが求められる。また、アンケートの問1・2・4でネガティブな感想をもった生徒がいることも事実である。こうした生徒に改善を促すためのコーチングや、活動における心理的安全性を確保するためのグループエンカウターの実践も今後おこなっていきたい。

6 おわりに

今回の実践はA教諭や1年生の国語科教員の協力なしには実施できないものであった。快く協力していただいたことに感謝している。また、Microsoft Teamsで中継をするということに関しても、準備の際に他の教員に協力していただいている。チャレンジングなことを認めていただける本校の環境には感謝の念に堪えない。

この実践を参観した同校教員からは、他学年に授業をするという手法や、ICTの活用について高評をいただくことができた。中には、学んだ内容を他者に授業するというのを数学に置き換えて実践してくれた教員もいる。学校再編にかかわった一員として、スクールポリシーを念頭に置いた授業というものが着実に広がりつつあることに手応えと喜びを感じている。

全教員が現状に満足せず研究と修養に努める中で、学校のあるべき姿、目指す生徒像、なにより目の前の生徒の日々の成長に妥協なく向かっていく。本実践が、そんな学校を一丸となつてつくっていくことの一助になることを願う。

引用文献一覧

なし。

参考文献一覧

大滝一登『高校国語 新学習指導要領をふまえた授業づくり 実践編 資質・能力を育成する14事例』明治書院 2019年3月10日
高木展郎『高等学校国語 カリキュラム・マネジメントが機能する学習評価 「観点別学習状況の評価」を進めるために』三省堂 2021年12月25日
愛知県総合教育センター「言語活動の充実に関する実践研究 令和5年度県立高等学校教育課程課題研究（国語）『授業実践4 適切な問いを立て、多面的・多角的な視点から自分の主張を組み立てよう』」 <https://apcc.aichi-c.ed.jp/kyouka/kokugo/shidouho/2024/kokaken05/jissenkenkyu05/jissenrkk4.pdf> (2024年7月20日)